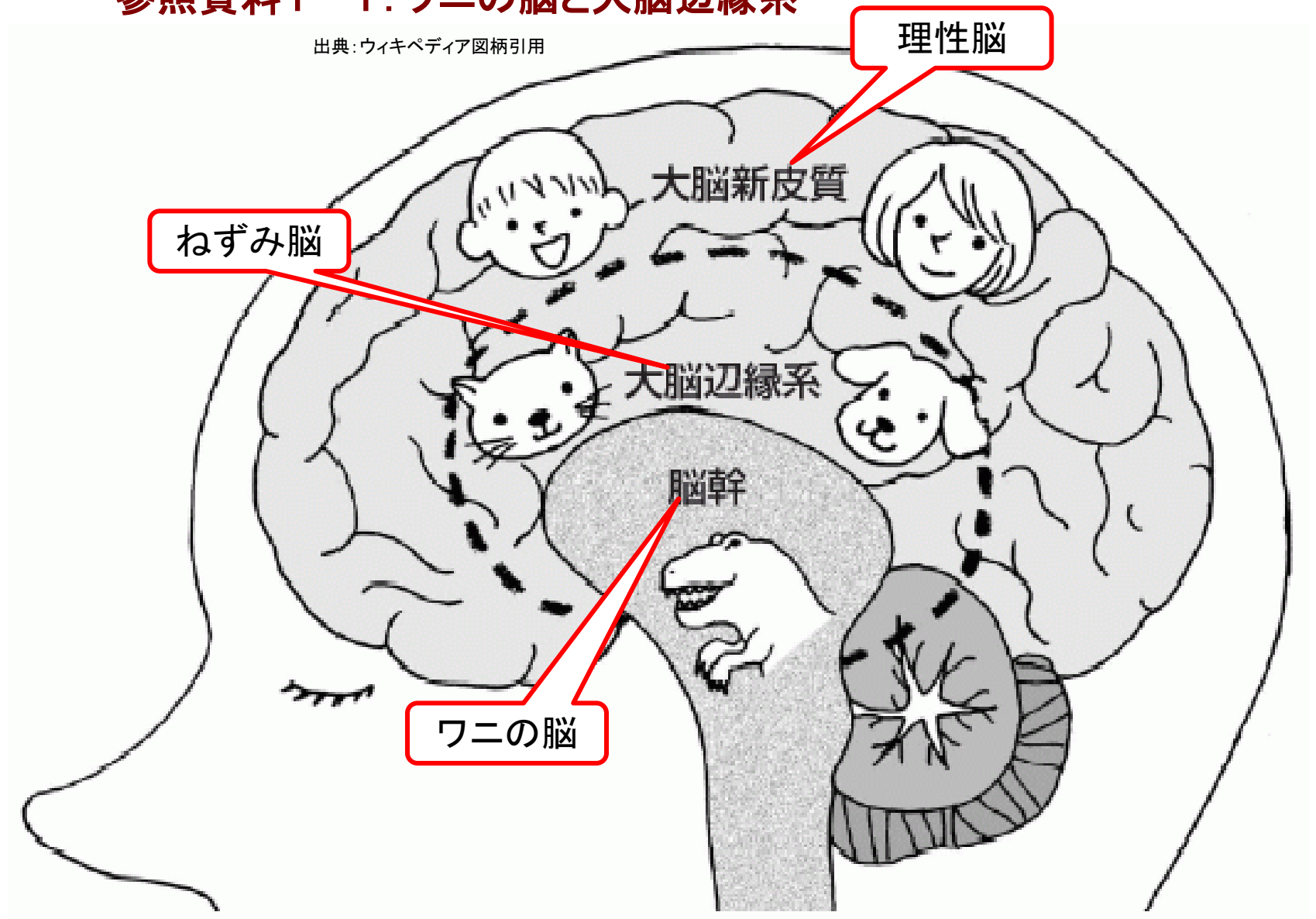


『日本の古代史とその文化』セミナー

「古代文化とその伝道者」講座の 第1回参照資料

参照資料1ー1:ワニの脳と大脳辺縁系

出典:ウィキペディア図柄引用



参照資料1ー2:ソクラテス、プラトン、アリストテレス



出典:「哲学の饗宴—ソクラテス・プラトン・アリストテレス」荻野博之著(NHKライブラリー)

参照資料1－3:胡蝶の夢

出典:ウィキペディア図柄引用



参照資料1－4: 孔子と論語

儒家（じゅか）とは、**孔子**を祖とする学派の総称のことです。この儒家の教えが儒教ですね。

孔子という人は、春秋時代末期に活躍していた魯という国の人。孔子が中心となって編纂されたといわれているのが「春秋（しゅんじゅう）」。春秋時代の命名のもとになっている書物です。

この書物は魯国の歴史本ですね。

あと、「論語」っていうのがあります。この論語は何なのか？と、いうと孔子の死後、彼の弟子たちによって孔子の言葉をまとめたもの。孔子自身が書いたわけではありません。

孔子は、「仁」をととても大切だと考えていました。「仁」とは、相手を思いやる気持ちのこと。

また、「**修身齐家治国平天下**（しゅうしんせいしかちこくへいてん）」という思想として持っていました。

これは、「**身を修め、家を齊え（ととのえ）、国を治めれば、天下は平らぐ**」ということ。

「論語」	解説
過ちては則ち 改むるに 憚ること勿れ。	まちがいを犯してしまったら、それを悔い改めるのにぐずぐずするんじゃない。 すぐに改めて、同じあやまちをくり返すことがないように心がけることが大切だ。
人の己を 知らざるを患えず。 人を知らざるを患う。	他人が、自分のことを理解してくれなくても、そんなことは気にするな。 それよりも、自分が他人のことを理解できないことに気をかけなさい。
義を見て為さざるは、勇、無きなり。	正しいことをしなければならぬ時に、正しいことをしなかったなら、それは勇気が無いということだ。
利に放りて行うときは、怨み多し。	自分の利益だけを考えて、他の人と関わったなら怨みをかうことが多いぞ。

参照資料1－5: 儒教の五常の徳

仁義礼智信(じんぎれいちしん)

儒教の教え、孔子や孟子の教えを基にできた言葉

仁:「愛」、広く人を愛し、思いやること。

義:「正義」、人が歩く正しい道。利欲にとらわれず、なすべきことをすること。

礼:「礼儀」、親や目上に対する礼。敬意を持って他者と接すること。

智:「知恵」、善悪の判断。道理を得る知識を重んじること。

信:「信頼」。現行一致。真実を告げ、約束を守り、誠実であること。

参照資料1－6：仏教の伝道・発展形態

発生場所

教義・目的

平城京



平安京



鎌倉



南都六宗：学派的要素が強く、仏教の教理の研究を中心に行っていた学僧衆の集まり

- ①三論宗(さんろんしゅう、中論・十二門論・百論)－華嚴宗や真言宗に影響を与えた
- ②成実宗(じょうじつしゅう、成実論)－三論宗の付宗(寓宗)
- ③法相宗(ほっそうしゅう、唯識)、中インドから玄奘が帰国し唯識説が伝えられる
- ④俱舎宗(くしゃしゅう、説一切有部)－法相宗の付宗(寓宗)
- ⑤華嚴宗(けごんしゅう、華嚴經)－四法界と言う世界感。物事の神髄をありのままに見る
- ⑥律宗(りっしゅう、四分律)－戒律の研究と実践を行う仏教の一宗派。真言律宗等へ。

天台宗：法華經(ほけきょう)を根本の教義とし、わが国には鑑真(がんじん)が伝え、819年「顕戒論」を表し、延暦寺で最澄が広めた。

真言宗：大日如来を教主、大日經・金剛頂經を根本經典として、仏と人の出会い(合一体験)、即身成仏(そくしんじょうぶつ)を説く密教を高野山で空海が広めた。

鎌倉六宗：天台宗を基本として、密教から顕教へと発展する。

- ①法然の浄土宗：「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えれば、誰でも極楽往生が約束される。
- ②親鸞の浄土真宗：法然の弟子として、妻帯肉食可。悪人正機説を唱える(歎異抄)。
- ③一遍の時宗：賦算(念仏を記した札を配り、受けとった者を往生させる)と踊念仏。
- ④日蓮の日蓮宗：真言としての法華經に基づき「南無妙法蓮華經」の題目を唱えることで、そのまま仏になれるし、国家も救われると説き開山。
- ⑤禅宗：菩提達磨を初祖とし、ひたすら座禅によって悟りを得ようとする宗教。
 - ・栄西：天台宗を中心に密教、禅を宋に学び、臨済宗を開く。
 - ・道元：正法眼蔵を表し「修証一等」を説き曹洞宗を拓く。

参照資料1－7顕戒論(けんかいろん)

大乘戒を受けて菩薩僧となり、12年間山中で修行することを義務づける。

平安初期の仏教書。最澄(さいちょう)著。3巻。

最澄は仏教による護国を実現するためには、純粋な大乘の菩薩(ぼさつ)僧の養成が不可欠であると考えた。

そこで比叡山(ひえいざん)に新たに大乘の戒律だけによる受戒によって僧の資格を与える大乘戒壇の設立を志し、天台宗の僧の養成の規則(『山家学生式(さんげがくしょうしき)』)の認可を朝廷に請うた。

奈良の仏教界はこれに対して強く反対したため、僧綱(そうごう)の四条式(山家学生式の一つ)への批判に対して最澄が反駁(はんぱく)を加えながら、戒律思想を詳説したのが本書である。

全体を5篇(へん)に分ち、56明拠(明らかな証拠)をあげて、大乘の寺院のあり方、『梵網経(ぼんもうきょう)』に説かれている大乘の僧の戒律、受戒の儀式の仕方、そのほか関連する事項について説かれている。819年(弘仁10)に著し、翌年朝廷へ提出した。

なお、大乘戒壇設立は、最澄没後7日目の822年6月11日に許可された。[田村晃祐]。

参照資料1—8: 大和絵(源氏物語絵巻)

天井からの視点で描く



出典: ウィキペディア図柄引用

参照資料1ー9: 仏陀の悟り

出典:「経営を活かす般若心境」松村寧雄著(ソーテック社)

